# 絵本の読み聞かせにおける一考察
## —読み手と聞き手の心の交流—

小島　佳子　　山野　栄子　　鈴木　壽眞子

**要約**

保育者養成に携わる筆者 3 名が「読み聞かせ」に関連したこれまでの体験や活動を振り返り、子育て支援に絵本を活用することの意味や価値を明らかにした。実践から見えてきたこととして、「読み聞かせ」が子育て支援の観点からは、何よりも親子が心地よい時間を共有することで心が繋がり、絆づくりに大きな意味を持つという共通点が見出せた。そして、「読み聞かせ」を共通軸としながら、良好な親子関係を築くための支援の在り方を検討していくことの重要性を示した。

さらに、将来子どもたちに「読み聞かせ」を実践し、子育て支援の役割を担う保育者を養成するという視点から、学生自らが、絵本に対する興味・関心や理解力を高め、積極的に「読み聞かせ」に臨む姿勢を育んでいくための具体的な方略について検討していくことを今後の課題とした。

**キーワード：　読み聞かせ　　読み手と聞き手　　心地よい体験**

### １．はじめに

「読み聞かせ」[注1]という言葉は、代田[1)]によると、子どもの本の研究と普及を目指して 1967 年に創設された「日本子どもの本研究会」が「読み聞かせ」と名づけたところから発したものである。「読み聞かせ」という言葉とともに読書運動の中で日本中に広がり、子どもに本を出合わせる効果的な方法として認められてきた。2000 年の「子どもの読書年」以降、図書館や書店などいろいろな場所で子どもたちに絵本の読み聞かせをする「おはなし会」などが行われるようになった[2)]。

保育所・幼稚園・認定こども園など乳幼児期の子どもが生活する集団の場においても読み聞かせの実践は数多く見られ、保育者が子どもと絵本を繋ぐ役割を担ってきている。さらに、保育・幼児教育の実践に止まらず、子育て支援の観点から、良好な親子関係を構築するための支援の一つとして、親子が心地よい時間を共有することができる読み聞かせを推奨していくことも大切な役割と考えられる。

保育者養成に携わる筆者 3 名（山野・鈴木・小島）は、これまで研修講師[注2]やボランティア活動などを通して読み聞かせの活動を重ねてきた。今回、それぞれの体験を語り合う中で、絵本の絵や言葉の豊かな表現が肉声を通して心に染み込んでいく感触

や一人読みでは得ることのできない満足感が、読み手と聞き手の両者に広がる実感を共有できた。

そこで、活動報告を綴ることで、改めて「読み聞かせ」が持つ意味や価値を明らかにし、今後への方向性を探りたい。

## ２．方法

本稿では、１．Ｋ市の家庭教育出前講座の一環として子育て中の親を支援する取組み、２．子育て支援の場や 障害者施設におけるボランティア活動での読み聞かせ、３．筆者の体験から「読み聞かせ」について考える。以上３活動を報告する。

## ３．活動からの問いかけ

### ３－１　Ｋ市の家庭教育出前講座「絵本を通して親子の触れ合い」（山野）

平成 29 年度から、Ｋ市の家庭教育出前講座の一環で年間３～４カ所の幼稚園・保育園・こども園で、主にその園の保護者を対象にして（園児も同席する場合もあり）「絵本を通して親子での触れ合い」と題して毎回 20 冊～30 冊ほどの絵本（うち８冊はＫ市の図書館が推奨している絵本）を持参していく。令和 2 年度は予定していた園全てがコロナ禍で中止になったが、令和 3 年度は 1 カ所のみ中止で、残り２園は感染対策を十分にとり少人数で実施できたので、それを報告する。

（１）日時　①令和 3 年 6 月　K,S 保育園　10 時～11 時
　　②令和 3 年 11 月　K,Y 幼稚園　10 時～11 時 15 分

（２）対象　①4～5 歳児の園児 37 人と保護者 8 人[注3]
　　②保護者のみ 18 人

（３）内容

１）子どもと保護者に向けて

子どもと保護者が一緒の場面では、まず子どもの年齢に合わせ、だれもが興味を持ちやすい絵本を選んだ。きむら ゆういち/作「いないいないばああそび」偕成社や樋勝朋己/文・絵「きょうはマラカスのひ」福音館書店、エルヴェ・テュレ/作・ たにかわ しゅんたろう/訳「まるまるまるのほん」を読む。子どもたちはすでに読んでもらい知っている内容の絵本であっても、読み手が変わることにより、新鮮な感じで興味を示して聞いていた。特に「まるまるまるのほん」は●を指で押し次々に変化する場面を一緒に参加しながら楽しんだ。保護者は、絵本は静かに聞くことと思いがちであるが、この場面を通して絵本を媒介に読み手と聞き手が一緒に楽しみながら読み進めていく方法もあることを知らせた。

２）保護者に向けて

保護者には、「絵本との出会いは楽しさや歓びが心に響くことが大切である。食

べ物は体の栄養、絵本は心の栄養である。子どもは絵を読んでいる。読んでもらった言葉を聞いている。優れた絵本との出会いは、一生の宝物になる」ことなどを話す。

下記に講話の内容を要約する。

①親子の絆を深める

絵本は読み手の存在が必要で、絵本を通して親子が関わり、一緒に体験したり共感したりすることで絆が深まる。大好きな人と一緒の時間を過ごす、心地よい気持ちの交流を共有することで「大事にされている・愛されている」と感じることができる至福の時間である。特に胎内で聞いていた母親の肉声で読んでもらうことは、何よりも子どもに安心感を届けることができる。これは子どもが育つうえで大切な基本「安心と愛着」を育むことになる。

②子どもの成長に影響

耳で聞く体験が言葉を理解し、想像力や考える力を養い、言葉の土台作りになる。すなわち豊かな感性や言葉、表現力を培うことに繋がる。また、絵本を通して絵や言葉、音声によりイメージが豊かになり、目には見えない感じる心が育つ。絵本から興味関心が広まり、さらに深く調べてみたリ試してみたりして知識が豊富になる。中でも、昔話にはその土地の生活と共に生きていて、面白さと共にその時代の願いや思いが語られている。そして、人の生き方や心のありようが示されているものが多い。

このように絵本の持つ力は、将来物事の本質を見極める力に繋がっていくのではと考える。

③優れた絵本の選書

絵の雰囲気や色彩、言葉の使い方・リズムや繰り返し、内容を吟味し、子どもの発達や興味関心に合わせるなどに配慮する。昔から長く読み継がれてきているものには優れた絵本が多い。保護者が選書に迷ったときは、園の先生や図書館の司書の方に相談するとよい。

④読み方

子どものペースに合わせて、ゆっくりと間を大切にして読むこと。読み手も一緒に楽しむこと。また心を込めて読み、読んだ後は読み手から感想を聞かず余韻を楽しむようにする。子ども自らが発した言葉は受け止め、一緒に感動することなどして読むようにする。

⑤絵本の紹介

発達段階に合わせて持参した何冊かの絵本を紹介する。その中で毎回 2 冊の本は必ず紹介する。1 冊はヒド・ファン・ヘネヒテン/作・絵　ひしき あきらこ/訳「あなたのことがだーいすき」フレーベル館、この本はどんなあなたでも大好き『あな

たはあなただから』と愛していることが伝わってくる。自分の子どもを愛することとその子らしさを大切にしてほしい思いを込める。あと１冊は、くすのき しげのり/作・石井聖岳/絵「おこだてませんように」小学館の絵本である。この本は、子どもが楽しいと思ってしたことでも大人の都合で怒られることになってしまう。子どもの心の揺れ動きに、大人が素直に寄り添い、子どもの心の声に気付くことの大切さを伝えている。時々涙して聴いてくださる保護者や「読んでもらうことは心地よいですね」と話される人がいる。

⑥最後に

大人になって子ども時代に読んでもらった絵本に出会うと、その時の楽しかった気持ちや読んでもらった人を思い出し、いつの間にか忘れていた気持ちが思い起こされる。子どもと一緒に絵本を読んで、大人も子どもも心豊かな時間を過ごしてほしい。二度とない幼少期、絵本を通して親子の絆をしっかりと築いてほしいと願う。

**（４）参加者の感想**

Ｋ市家庭教育出前講座の主催者が取られたアンケート結果を了解の上、一部抜粋

Ｑ１．講座の全体的な印象

| 園　名 | ①よかった | ②普通 | ③あまりよくなかった | ④よくなかった |
|---|---|---|---|---|
| ① K,S 保育園 | 8 (100%) | 0 | 0 | 0 |
| ② K,Y 幼稚園 | 17 (94.4%) | 1 (5.6%) | 0 | 0 |

Ｑ２．講座の感想や印象に残ったこと（自由記述）

・絵本の大切さを改めて知り、子どもに合わせた絵本選びや子どものペースで本を読んであげたい
・お腹の中から聴覚があって、声かけの大切さに気付いた
・ゆっくり、はっきり、間を大事にを心がけていきたい
・自分で文字が読めるようになったが、絵本は読んでもらうもの。できるだけ読んであげるようにしたい
・自分も楽しみながら本を読むというのが、とても心にささった
・絵本を読んでもらうことで、心が温かくなった
・毎晩の読み聞かせをスタートする意欲の出るよい機会になった
・子どもが愛されていると感じるような接し方をすることが大切だと気づいた
・子どもの目線で、子どもの気持ちになって一緒に考える
・子どもとの関わり方で、「いつも余裕がなくてできていないことだらけだな」と反省し、子どもの好きな遊びを一緒に楽しむ時間をつくりたい
・ついつい怒ってしまう自分がいるので、聞き上手になろうと思ったし、子どもの困り感を受け止めて、解決する力をつけていけるように関わりたい
・幼少期を大切にしていきたいと深く思い、絵本の時間を親子で大切にしたい
・絵本の読み聞かせをしているが、改めて良さや成長につながっていることを知れ、続けていきたい

## ３－２　ボランティア活動における読み聞かせ（鈴木）

### （１）読み聞かせを通して

ボランティア活動として子育て広場での活動年間 5 回、障害者施設で年間 10 回程度、その他子育て支援の場などで読み聞かせをしている。それぞれの実践を通して、絵本との出会い、聞き手と読み手の交流について考えてみる。読み手は、絵本を通して楽しさを共有したいと思う。聞き手はどう感じているのだろうか。

読み聞かせをするに当たって、絵本選びは大切な準備の一つである。どのような絵本を選べば、「聞き手に楽しんでもらえるか」また「読み手はその絵本を通して、何を伝えたいと思うのか」を考えて選書する。

文学的で芸術性があると言われる名作絵本や話題の絵本、読み手自身が読みたい・好きな絵本など選書の理由はいろいろあるが、筆者が大切にしている点は、聞き手となる子ども（大人）にその絵本に興味・関心を持ってもらえるか、絵と言葉から何を感じてもらえるか、その絵本に伝えたいメッセージがあるかなどである。

読み聞かせをしながら、聞き手の反応を受け取り、読み手もまた、受け取った反応に対して心の中で応答する。見えない気持ちの交流が生まれ、読み手の声や表情に影響していく。聞き手に対して、絵本の楽しさや面白さを届けることができたか、絵本を通しての繋がりができたかどうかを常に振り返り、読み手としての感性を磨いていきたい。

### （２）0～1 歳児の読み聞かせ

生後 10 か月ころから 1 歳半頃までの子どもは、初めて見る絵本や初めて耳にする言葉にどのような反応をするのか。聞き手に伝わることは何か、聞き手と読み手の間で互いに感じることは何かを考えてみたい。

10 か月頃の子どもに 「だるまさんが」を読み始めるとじっと絵をみているが、読み手が読み終わらないうちにもう次のページをめくろうとする。この行動は「めくることが楽しくてするのか？」「次のページの絵が見たくて手が出てしまうのか？」よくわからない。他の絵本を見せても同じような反応がしばらく続く。やがて、1 歳を過ぎてくると、今までとは違った様子が見られるようになる。読んでいる途中でページをめくることがなくなり、時々、読み手の顔を見たりする。絵を見ながらじっと読み手の声を聞いている。言葉の理解が少しずつ発達し、絵と言葉を結びつけて見る・聞くことができている。聞き手と読み手との視線が合い、互いに絵本を見て楽しいと感じる心の交流ができるようになったといえる。

### （３）親子で読む

子育て広場では、保護者の膝の上に座って、じっと絵を見ている子どもの姿をよく見かける。しっかりと絵を見、読み手（保護者）の声を聞こうとしている。安心できる人の膝の上で、心地よい声を聞きながら読んでもらう体験は、子ども（聞き手）に

とって大切な心の栄養となる。また一方で保護者（読み手）においては、絵本を見ているわが子の穏やかな表情に気づき、育児の大変さを忘れさせてくれる瞬間でもある。聞き手と読み手の心の交流が少しずつ積み重なり親子の絆となって育って行ってほしい。絵本を媒介として聞き手と読み手は互いに気持ちを伝え合っているように思う。

**（４）障害者施設での読み聞かせ**

作業の合間の貴重な時間に行う障害者施設の読み聞かせでは、季節感のある内容の絵本や昔話の絵本を選んでいる。利用者が「一息つける・ほっとできる・楽しい」と感じられる絵本や空想の世界へ一瞬入れるような絵本を取り入れる。また、聞き手となる人の生活を感じながらその生活に繋がる絵本を選ぶ。

例えば、利用者が施設で飼っている犬と関わる時の穏やかな表情や心和む一時を過ごしている様子から、犬とのふれあいは大切な日常の一場面であると感じた。動物と接することで、一人一人の表情が引き出されていることが印象的であった。利用者にとって絵本の読み聞かせが、仲間と過ごす中での楽しい時間となるよう願い、動物と人とのつながりを描いた絵本や日常の生活に繋がる絵本を選ぶようにする。

＜実践した絵本＞ジーン・ジオン/文　マーガレット・ブロイ・グレアム/絵　わたなべしげお/訳「どろんこハリー」福音館書店、サムイリ・マルシャーク/文 ウラジミル・レーベデフ/絵　うちだ りさこ/訳「しずかなおはなし」福音館書店

昔話も喜ばれる。昔話では、絵の印象や言葉が一体となって物語が流れているか、言葉を聞いて場面を理解できるかなどを考えて選書する。「言葉がゆったりと流れている」「話の中にユーモアがある」「繰り返しの言葉、リズム感のある言葉」などに聞き手のちょっとしたリアクションがある。ユーモラスな場面でクスクスと聞こえてくる笑い声や作業の緊張からほぐれた表情が印象的である。どのような絵本（お話）が聞き手の感情を引き出してくれるのか、読み手自身の感覚も大事にしながら、この聞き手と読み手の交流を継続していきたいと思う。

<実践した主な絵本>

クライナ民話　エウゲーニ・M・ラチョフ/絵　うちだ りさこ/訳 「てぶくろ」福音館書店、松居直/著/再話 赤羽末吉/画「こぶとりじいさん」福音館書店、水沢謙一/著 梶山俊夫/画「さんまいのおふだ」福音館書店、瀬田貞二/再話 梶山俊夫/画 「おんちょろちょろ」福音館書店

**（５）読み手の思いを大切に**

なぜこの絵本を読むのか原点に戻って考えてみると、単純に「聞き手の笑顔が見たい」「一緒に何かを感じたい」という読み手の感情そのものなのかも知れない。聞き手と読み手の互いの気持ち（感情）の交流を大事にしたい。読み手それぞれに思いや方針があってよいと思う。筆者は、聞き手の一人一人に誠実に思いをこめて読むこと、絵本を見て心穏やかになったり楽しいと感じたりする瞬間を大切にすること、いつも

聞き手が求めている絵本は何かを考えて選ぶこと、読み聞かせの準備段階を大切にすることをポリシーとしている。

絵本の読み聞かせを通して、聞き手が自然に感情を表現したり、読み手がその感情を共有したりすることが感情の交流に繋がっていることを再確認した。

### ３－３　筆者の体験から「読み聞かせ」について考える（小島）

#### （1）「くだもの」の絵本との出会い。

題名　　：　『くだもの』

作者　　：　平山和子/作　　平山和子/絵

発行元　：　福音館書店

私がこの絵本と出会ったのは、保育現場で仕事をしていた昭和の時代である。実物と思わせるような果物の絵が印象的であり、子どもたちが身近な果物に関心を持ち、絵と言葉をマッチングして覚やすい絵本として読み聞かせをしていた。時を経てNPO「絵本で子育て」センター主催の絵本講師養成講座を受講して、聞き手としてこの絵本と再会することとなった。絵と言葉がやさしく溶け込んで、温もりに包まれたような心地よさを感じたことを今も鮮明に覚えている。そして、絵とともに私の心に届いたのは、果物の名称ではなく『さあ　どうぞ』という美しい日本語であった。また、講座の中で、作者が絵を描くために時間をかけ、描き直しを重ねたというエピソードに触れ、絵本作りに込められた子どもたちへの愛情と責任の深さを知り、読み手の役割の重要性について再考する機会となった。

#### （2）『くだもの』の絵本から届けたいこと

松居 [3]は、「現代は『言葉の消える時代』だと捉え、『人間の口から出る声を、じかに聞く』そういう声としての言葉の体験が、どんどん貧しくなっているように思う。自分のことを大切に思ってくれる人からの、気持ちのこもったあたたかい言葉を聞くことが、子どもの育ちにおいて、もっと言えば、人間が生きていく上で、欠かすことのできない経験になるという確信に至った」と述べている。

『さあ　どうぞ』という言葉には、読み手から聞き手に届けられる愛情がいっぱい詰まっている。日々慌ただしい生活を送っていると、この絵本に描かれているような「ゆったりとした時間」を共有することはなかなか難しい。それゆえに普段子どもにかけられない言葉を「読み聞かせ」を通して、気負わずに自然体で親から子どもに思いを込めて届けられるとしたら、親子の絆は確実に深まっていくに違いない。

#### （3）　読み手こそ聞き手になる体験を

筆者は自身の体験から、読み手が聞き手を経験する場を提供したいと考えるようになった。ここで言う読み手とは、子育て支援の担い手や保育者養成校の学生である。依頼を受けた子育て支援に関係した研修においては、プログラムの一部に絵本紹介を位置づけている。「読み聞かせ」において心がけたい豆知識や書評、作者の紹介（私

の知り得るエピソードなどを交えて)、出版社などを簡潔に伝えて絵本を紹介する。その中から1冊から2冊の絵本を読む活動を続けている。

**1）令和3年度に 「読み聞かせ」を実施した講座**

＜S市ファミリー・サポート・センター提供会員養成講座＞

実施日　：令和3年6月4日、11月9日実施

講座内容：「子どもの生活と遊び」

対象者　：提供会員養成講座受講者（小さい子を育てている親、保育ボランティア、保育士・看護師有資格者、子育てを終えた人等）

＜T市保育所職員研修会＞

実施日　：令和3年6月3日、8月5日、10月12日、11月17日実施

講座内容：保育士等キャリアアップ研修「保護者支援・子育て支援」

対象者　：T市公私立保育所保育士・認定こども園保育教諭

**2）聞き手に届けたい願い**

大人は普段絵本の読み手になることはあっても聞き手になる体験はほとんどないと言える。まずは、肉声を通して届けられる言葉と絵が語りかける視覚的な情報から「読み聞かせ」の魅力を感じ取ってほしい。そして、聞き手として得た実感を大切にしながら、読み手と聞き手の心の交流や感情の共有の重要性を理解して、良好な親子関係を築くための一つのツールとして実際の子育て支援に役立ててほしいと願う。

**3）学生の読み聞かせワーク**

平成30年度から本学2年次選択科目「乳幼児の理解」において、絵本の魅力を伝える講義と学生による読み聞かせのワークをシラバスに組み込んでいる（令和3年度はコロナ感染予防に配慮して、20分程度3コマ実施)。学生は2年生になると、実習等で得た体験や学びから子どもの年齢や発達に配慮した選書を心がけるようになる。しかし、ワークの取り組みの中では、選書する読み手の意図が曖昧で準備不足のまま安易に読む姿が見られることがある。そこで、選書の意図や伝えたいことをワークシートに記述し、読み聞かせ後には、読み手の自己評価と聞き手からの評価や感想等を記述する取り組みを行っている。ワークのねらいとしては、①学生自身が読む時と読んでもらう時との違いに気づき、「読み手と聞き手の心地よい交流」の重要性について学ぶこと、②客観的に自分の「読み聞かせ」を振り返る体験になることを意図としている。聞き手としての気づきや学びが、今後の子どもたちへの温かい読み聞かせに繋がっていくと考える。

また、筆者は、絵本にまつわるエピソードや子どもの反応などを語ることを大切にしている。語りから学生が具体的なイメージを持つことで、絵本への興味関心を高める刺激になると考えるからである。刺激を受けた学生が、自ら多様な絵本に触

れ、好きと思える絵本、魅力を感じる絵本などを増やすことで、絵本選びの選択肢を幅広く持つことができる。そのことが絵本の理解力にも繋がっていくと考えられる。

**４）令和３年度のワーク終了時に行った学生へのアンケート調査結果より(一部抜粋)**

学生には、ワーク終了後に絵本に関するアンケート調査（無記名）を実施し、研究主旨を説明したうえで同意を得た。(受講学生 32 名、回収数 31 件)

今回は予備的な資料としてアンケート調査結果の一部を報告する。(令和４年１月実施)

表１　読み手と聞き手の感想の比較　（5 項目から選択回答）

| | 読み手の感想（人数） | 聞き手の感想(人数) |
|---|---|---|
| 大変楽しい | 9 | 15 |
| 楽しい | 18 | 16 |
| まあまあ楽しい | 4 | 0 |
| あまり楽しくない | 0 | 0 |
| 楽しくない | 0 | 0 |

表２　とどちらが楽しいと感じるか（2 項目からの選択回答）

| | |
|---|---|
| ひとりで読むのが楽しい（人数) | 10 |
| 誰かと一緒に読むのが楽しい(人数) | 21 |

表３　自由記述における学生の回答の一例

**聞き手になって楽しいと感じた理由（一部抜粋）**

・自分が読んだことのない絵本をみることができて自分もこの本を読んでみたいと思い楽しかった
・聞き手になるとゆっくり話を聞き、絵を見ることができるので楽しい
・一人一人違った表現の方法があり、面白かった
・読み手が明るく、笑顔で楽しんで読んでくれたり、優しく語りかけたりしてくれるので楽しかった
・聞き手になることはないので、新鮮で楽しかった

**聞き手になって気づいたこと・学んだこと(一部抜粋)**

・自分が読んでいる時に気づかなかったことや読み手から学んだことが沢山あった（読み方の工夫、本の角度、めくり方、速さ、声の大きさ、下読みや準備の大切さなど）
・聞き手になって、違う視点で考えることができると思う
・知らなかった絵本を知れた

予備的な調査結果ではあるが、学生が「読み聞かせ」ワークを楽しいと感じ、特に読んでもらうことが楽しいと感じていることが確認できた。また、聞き手になる体験をしたことで、客観的な視点で気づきを得ていることや自分を振り返る機会に

なっていることの記述があった。聞き手になる体験が教育的な意味をもつことが推察できる。

この結果を踏まえ、さらに調査資料を増やし、精査することで学生が「読み手と聞き手の体験」から何を学んでいるのかを探りながら、学生の変容について検証していきたい。

## ４．活動からの考察

３者の実践から見えてきたものをまとめると以下、①絵本を活用した子育て支援②絵本との出会い・読み手との出会い③読み手が聞き手になる体験の 3 点に集約することができる。

### ４－１　絵本を活用した子育て支援

家庭教育出前講座を引き受け、回を重ねていく中で、猛省も含め自分の子育てを振り返りながら、改めて絵本の持つ力に気づく機会になった。もともとは学生時代のゼミの先生との出会いが絵本大好きの第一歩であった。その後、保育者時代に絵本に興味関心の高い職場や仲間との出会いが大きく影響する。子どもに絵本はもちろんだが、それ以前に大人が絵本を読む・読んでもらう体験をしてほしい。講座で保護者に絵本を紹介しながら聞き手側の体験をしてもらうと絵本の世界を共有する心地よさを実感する方が多い。アンケート結果をみると、予想以上に保護者が自分の子育てと重ねて聴き、もっと子どもと一緒に絵本を読む時間を大切にしていこうと受け止めてもらっている。時には紹介したすべての本を図書館で借りてきて読んだとの報告を受けて、紹介する絵本の選書を吟味する責任を感じた。

講座での絵本との出会いが、親子が絵本を媒介にして一緒の時間を楽しみ、お互いが温もりを感じ合い、絆を深める機会になってほしいと願う。このことこそ、本来子どもが求める何よりも貴重な体験であると考える。ただ、講座に参加していない保護者に向けてどのように発信していくかは今後の課題である。

### ４－２　絵本との出会い・読み手との出会い

ある絵本との出会いが、私の絵本に対する意識を少し変えるきっかけとなった。ガース・ウイリアムズ/ぶん・え「しろいうさぎとくろいうさぎ」福音館書店である。色彩はシンプルだがウサギの表情は繊細に描かれている。ほのぼのとした会話が続く、何度か読んでいくうちに心が穏やかになっていく感覚をもった。絵本を自分で読んでみること、また、作者についても知り、作者のメッセージを受け取ることがその絵本をより好きになることに繋がった。絵本を読んでもらう体験は、心地よいものであってほしいと思う。人それぞれ、子ども一人一人、絵本を通して感じることは異なる。「どの時期にどの絵本を、誰に読んでもらったか、どのような感情をいだいたか」という経験によって、その絵本が好きになったり、興味を持ったりすることになる。絵本を通して読み手の思いが聞き手に伝わり、また聞き手の感情を受け取って一緒に読

みたい・聞きたいと思う。このいい循環を大切にしたいと考える。

### ４－３　読み手が聞き手になる体験

読み手となる親、保育者、子育ての支援の担い手、学生などが聞き手になることで、まずは、読んでもらう心地よさを体感できることを大切に考えたい。子どもの絵本は、誰かに読んでもらうことを第一義として作られているといっても過言ではない。それだけに、それぞれの場で読み手と聞き手の心地よい心の交流があってこそ、一人読みでは得られない満足感を読み手と聞き手の両者で共有することができる。筆者自身が聞き手を体験することで得られた感触として、読み手になった時に「うまく読む」ことが求められるのではなく「心を込めて読む」ことがいかに大切であるかに気づかされた。その気づきからは、豊かな「読み聞かせ」とは、技術よりも、絵本を深く読み、伝えようとする読み手の気持ちにあることを示唆してくれているように思う。

## ５．まとめ

読み聞かせの効果については、「言葉の獲得」「想像力を育む」「学力の向上」「読書好きになる」など多数挙げることができるが、子育て支援の観点からは、何よりも親子が心地よい時間を共有することで心が繋がり、絆づくりに大きな意味を持つという共通点が見出せた。親にとっても子どもと過ごすかけがえのない時間であると同時に、子育てに疲れていても癒しの時間となり、子どもの成長を感じ取ったり、関係を見直したりすることができる時間ともなる。そのことに多くの子育て中の親が気づき、家庭での読み聞かせが普及することを願う。

また、保育・幼児教育の現場における絵本の重要性や読み聞かせの活用頻度を考えると保育者の育成にあたり、絵本の価値や読み聞かせの意味について学生が学びを深めることが求められる。学生が一冊一冊の絵本に込められた願いや思いに触れ、考え、感動したり、共感したりできる機会を提供していくことが重要である。そして、読み手や聞き手の体験を重ねる中で、学生一人一人が感性を磨き、自ら絵本の読み聞かせについて「もっと学ぼう、実践しよう」とする主体的な学びへの姿勢や意欲を高めていくことが必要と考えられる。

今後の課題として、子育て支援における「読み聞かせ」の実態や保育者養成における「読み聞かせ」実践活動の効果について調査し、検討していきたい。

＜注＞

注１：「読み聞かせ」という言葉には、聞き手よりも読み手の立場が上にあるようなニュアンスがある。現在、「読み語り」「読みっこ」などの言葉に置き換えられることがあるが、ここでは、社会的に定着した用語として、この表記を使用する。

注２：「読み聞かせの絵本」については、著作権等があるので場所や方法などを吟味した。

注３：写真はＫ市担当者より提供されたものを使用する。

引用文献

１）代田知子「読み聞かせわくわくハンドブック　家庭から学校まで」　一声社 2001

２）児玉ひろみ「0～5 歳子どもを育てる「読み聞かせ」実践ガイド　小学館　2020

３）松居 直「絵本は心のへその緒」　NPO ブックスタート　2018

参考文献

１）松居　直「絵本とは何か」日本エディタースクール出版部　1998

２）中村　柾子「絵本はともだち」福音館書店 1999

３）林田　哲治「子どもが絵本と出あうとき」１　解放出版社　2000

４）松居　直「絵本のよろこび」NHK 出版　2003

５）日本児童文学「特集：いま、絵本はどうなっているのか」2004 3・4 月号、「特集　絵本テキスト号『絵本とは、絵本入門』石井光恵」2017 3・4 月号　日本児童文学者協会

６）石川　晋「教室読み聞かせ」読書活動アイデア 38　明治図書出版株式会社 2013

７）松居　直　松居直講演録「こどもえほんおとな」NPO 法人「絵本で子育て」センター　2016

８）瀧　薫「保育と絵本」 エイデル研究者　2018

９）監修 子育て支援合同委員会 編集「こころを育み　こころをつなぐ　絵本 101 選」編集委員会 『子育て支援と心理臨床』増刊第１号 「絵本 101 選」 福村出版 2012